

輪島朝市 新城で復活の道探る

能登半島地震と火災で被害

関係者が視察

2024年1月の能登半島地震と大規模火災で大きな被害を受けた石川県輪島市の輪島朝市の復活のためのヒントにしようと、同市朝市組合の関係者16人が22日、新城市で開かれた「しんしろ軽トラ市のんほいルロット」を視察した。活発に意見交換し、輪島朝市の関係者は「新しい朝市の形を考えるうえで参考になった」と手応えを口にした。

(伊東誠)

軽トラでの販売 早期再開ヒントに

軽トラ市は、軽トララックの荷台に商品を積んで1カ所に集結し、テーブルやテントを広げて販売する手法で一時的にミニ商店街が出現する。愛知大三遠南信地域連携研究センター(戸田敏行センター長)は軽トラ市の手法に輪島朝市の早期復活の可能性があるとして、スズキと連携して24年11月から隔月で新城市の軽トラ市で「輪島朝市復興軽トラ市」を出店。能登の魚介類や乾物などを販売するなど研究を進めている。

朝市組合は輪島市内の仮設拠点で復興朝市を開きながら、新たな朝市のスタイルを模索。出張朝市として全国に赴き、PR活動を行っている。

朝市組合の一行は、73店が並ぶ、164回目の軽トラ市を見学。新城市内のまちなみ情報センターで、警察、消防署、保健所への許可の対応や宣伝方法、お金の流れ、店の場所の決め方などの説明を1時間かけて受けた。質疑応答では軽トラ市側から「出店者の新陳代謝は進んでいるのか」という逆質問も。朝市組合側が次の世代につなぐ難しさを説明すると、軽トラ市関係者も共感していた。

視察を見守っていた戸田センター長は「軽トラ市を定着させてきた新城市と、朝市を長年続けてきた輪島市。意見交換でお互いに学ぶ点は多かった」と話す。

朝市組合の中道肇副組合長は「新たな朝市をつくる際、店の場所取りは大きな課題。その点で、軽トラ市関係者が試行錯誤を繰り返しながら店を決めてきた手法は参考になった」と述べた。



能登の海産物を販売する愛知大の学生の様子を見守る輪島朝市の組合員ら。新城市で